

韓国短編 小説を読む

西永良成

1

二〇〇二年は肯定的な面でも否定的な面でも、朝鮮半島を私たちにぐっと近づけた年として記憶されることになるだろう。私個人も三月にわずか三日ほどだったが、初めてソウルを訪れる機会に恵まれ、出会った人々の望外の厚情と親切にひたすら恐縮し、感激しながらもどってきた。むろん三日程度の滞在で韓国のことを云々する気などさらさらないが、彼らが現在どういうことを考え感じながら生活しているのか、それを知るには適当な文学作品を読むしかあるまいという思いだけは持ち帰った。

言うまでもなく、私たちの国は三六年にわたって朝鮮半島を植民地化し、その歴史的な負債をまともに清算しないまま今日にいたっている。また、植民地主義の負の遺産としての、在日朝鮮人差別の問題もいまだ充分な解決をみていない。私たちにとってそのような恥ずべき過去の地域文学は、たとえば私が専門にしているフ

ランス文学などと違って、けっしてたんなる「外国文学」ではありえない。そのことを痛烈に教えてくれたのは、かつて私たちの同僚であった故長璋吉氏の名著『私の朝鮮語小辞典』だった。そこには私などには想像もつかなかった覚悟と含羞、そして繊細さが見られ、なるほど朝鮮文学にはこのようにして近づくものなのかと驚き、感服した。朝鮮文学に接するにはきつと、あのような覚悟、含羞、繊細さが必要とされるのだと今でも思う。

しかしまた、ただ隣国の人々がどのような気持ちで同時代を生きているのかという関心からだけでも、朝鮮韓国文学を少しは知っておくべきだとも考える。さいわい格好のテキストがある。私たちの研究所の同僚であり、この三月に本学を定年退職される三枝壽勝教授が中心になって編集され、しかもいづれの巻の解説も担当されている三つの訳書、すなわち『朝鮮短編小説選』（上下二巻、大村益夫・長璋吉・三枝壽勝訳、岩波文庫、一九八四年）、『韓国短編小説選』（大村益夫・長璋吉・三枝壽勝訳、岩波書店、一九八八年）、『現代韓国短編選』（上下二巻、三枝壽勝他訳、岩波書店、二〇〇二年）である。そしてこれには各巻の解説と同様、やはり三枝壽勝著『韓国文学を味わう』（国際交流基金アジアセンター刊、一九九七年）が大変貴重な導きの糸になってくれる。

南北に分断された朝鮮半島の両国の呼称の問題、そしてこの問題と密接に絡んでいる在日朝鮮人の国籍問題の複雑さのことは知られている。ただ、抗日抵抗運動が開始された一九二〇年代から日本の敗戦によって朝鮮半島が一時的に解放された一九四五年のあいだに発表された作品を収めた最初の選集が、『朝鮮短編小説選』となっているのは当然である。まだ分断以前の時代であるし、解放後の混乱期に北に渡り、そのまま処刑されたり、行方不明になったりした作家たちの作品も多いのだから、そればかりか、敵国の言語にはかならない日本語を強制され、日本語で作品を書かざるをえなかった、いわゆる「親日」作家たちもいた。この選集には、東京に留学し、下宿先の偏屈な家主と孤独な者同士の不思議な人間的交流をもつ朝鮮人学生のことを題材にした許俊（ホ・ジュン）の「習作室」のように、ちよつとしんみりさせる作品もある。

とはいえ、ここに選ばれた大半の作品は日本の植民地統治時代の過酷で悲惨な現実を題材にしたものである。ただし、フランスの帝国主義、植民地主義を苛烈に告発したフランツ・ファノンのように直截な日本の帝国主義、植民地主義批判・糾弾の作品はない。そもそもそんな作品は存在を許されない状況だったので、書かれるはずもなかったのである。だから、時代批判、現実告発といっても、当時の警察署の過酷な取り調べを描いた

金東仁（キム・ドンイン）「笞刑」や、無能で卑屈な朝鮮の専門学校の日本人校長やその陰險な部下になりはてた教授にたいして、知的にも人間的にもはるかに優秀な朝鮮人非常勤講師が抱く侮蔑と憤怒を描いた俞鎮午（ユ・ジン）「金講師とT教授」のような黙示的な抵抗文学しかない。だからこそ逆に私たちは、そのような黙示的な抵抗文学しか残されなかったことに、当時の植民地支配の過酷さと近代的な主体を確立しようにもその可能性すら奪われていた朝鮮人作家たちの、言いしれぬ鬱屈をこそ想像してみるべきだろう。

一九二〇年代以降の文学的流派のひとつにプロレタリア文学があった。だが朝鮮では、同じプロレタリア文学といっても、一律に暗く悲痛な作品ばかりが書かれたわけではなかったように、羅稻香（ナ・ドヒャン）「桑の実」や李孝石（イ・ヒョソク）「そばの花咲く頃」などの作品に出てくるような、貧しく悲惨な境遇にありながらも、どこか楽天的で逞しい明るさを見せる男女の言動に、読者はどこか救われる思いがする。三枝さんは朝鮮文学の伝統として、金芝河（キム・ジハ）の抵抗詩にも通底するヘパンソリの精神、すなわち諧謔とユーモアを強調されているが、その精神がこのふたつの短編にもうかがわれるような気がした。ただ、私がつとも印象深く読んだのは、朝鮮の伝統的なもの、土着なもの（シャーマニズム）が外来のもの（キリスト教）に呆気なく敗退してしまう様を、巫女の母とキリスト教に入信した息子との悲劇的な愛憎と別離をとおして造形してみ

せた金東里（キム・ドンニ）「巫女図」だった。

『韓国短編小説選』は植民地支配から解放された一九四五年頃から一九七〇年代の終わりまでの作品を収めている。時間の長さからいえば、植民地時代の三六年とほぼ同じ三五年間だが、この期間に韓国が経験しなければならなかったのは解放直後の混乱の数年であり、四八年に南北それぞれに政府ができた国の分断の固定化であり、その二年後の朝鮮戦争の勃発、三年間にわたる南北の同民族同士の血を血で洗うような戦いだっただけ。六〇年には学生デモによって李承晩独裁政権が崩壊したものの、翌年に軍事クーデターによって朴軍事政権ができる。そして、この反共軍事独裁政権と民主化を求める知識人・学生たちの弾圧と抵抗の連鎖が八〇年代までつづいた。私たちの国では一身にして二生を得るなどと言うが、韓国人たちは一身にして三生も四生も経験せざるをえなかったと言えるほど度重なる激変と激動の三五年間だったのだ。

この選集に収められたうち、「巫女図」の作者金東里（キム・ドンニ）の「興南撤収」は解放直後の混乱期に逃げまどう人々の生々しいエピソードを、黄順元（ファン・スノン）の「曲芸師」や孫昌渉（ソン・チャンソプ）の「生活的」は混乱期のぎりぎりの生活情景をリアルに描いている。また、金源一（キム・ウォニル）「圧殺」は当時の南を支配した権力の闇と凄まじさをかいま見せてくれる。さらに私たちが金石範の作品群で知っている済

州島の暴動と弾圧、いわゆる四・三事件のことは、玄基榮（ヒョン・ギョン）の「トリヨン岬の鳥」に貧しく若い母親の視点から哀切に語られ、南北分断を題材にした作品としては、分散を余儀なくされた一家の家庭悲劇の形で李浩哲（イ・ホ Chol）「いらだつ人々」にさりげなく、しかし効果的に描かれている。

私がこの選集でもっとも強い感銘をうけたのは、冷戦下の韓国に進駐したアメリカ軍兵士にレイプされた母親をもつ息子がのちにアメリカ人女性をレイプして復讐するという犯罪をおかして逃げ込んだ山中、目前に迫った死を待ちながら亡き母親に切々と悲痛な呼びかけをする形で書かれた南廷賢（ナム・ジョンヒョン）の「糞地」と、日中戦争中日本兵として出征し、勇敢な同胞兵士を救えなかったばかりか、のちにその同胞の兵士を日本の官憲に売った同胞にたいして、何度も機会がありながら制裁をくわえられなかった事情を端正な言葉で語っている李炳注（イ・ビョンジュ）の「弁明」だった。このふたりの作家のものをもっと読んでみたい気がする。

六〇年代以後の二〇年間、韓国は政治的自由の問題を棚上げにしたまま急速に近代化されてゆく。俗に「圧縮近代」と呼ばれるものがそれである。その結果、比較的平穏な日常生活に題材を得た作品も登場するようになる。ある林の空き地に家を建てキジを飼って大儲けする目論見を抱いていたのだが、都市計画でその土地が急遽収用され、跡地に教会が建てられるという呆気ない結末に終わる親戚の話を書いた河瑾燦（ハ・ゲンチャン）の

「三角の家」や、ある小説家のソウルでの微笑ましい新婚生活の細部を軽妙なタッチでユーモラスに語った崔仁浩（チェ・インホ）の「家族」などは、たんに主題だけではなく、文体的にみても「圧縮近代」下の新しい世代の代表作だと思われる。他方あいかわらず「パンソリ」の精神も健在であって、どこまでも逞しく明るい諧謔と笑いの精神は、たとえば米軍基地で図太く働き、アメリカ兵と同棲して子供をもうけ、そのアメリカ兵の死後、あつけらかんと子供をつれてアメリカに移住する女性の話を書いた朴婉緒（パク・ワンソ）「空港で出会った人」や、早越期に自分の田畑を潤すために他村の水を失敬し、その水を吸い上げるポンプに必要な電気も電気会社が無断で引いてしまう口達者な農民のすつとぼけた話、李文求（イ・ムング）の「うちの村の金さん」がそうだと思われるが、このふたつの短編はときには河内弁まで駆使した三枝さんの名訳で楽しめた。

『現代韓国短編選』は上巻が一九九〇年代の作品、下巻が一九八〇年代の作品というように、年代的に見れば変則的になっている。韓国では七九年に朴大統領が暗殺され、八〇年には光州事件があり、その後軍を背景にした事実上の軍事独裁政権が一九九三年までつづき、この間民主化の要求とそれへの弾圧が繰り返された。国民投票によって選ばれる共和国型の大統領が軍を統制下に置いて統治したのは、やっとこの一〇年たらずのあいだにすぎない。したがって、文学も政治的あるいは歴史的意

識との審美的距離を容易に保ちがたい時期がづづいてきた。そこで下巻に収められた八〇年代の作品にも、そのことがかえって独特の美質として鮮やかに活かされている作品がいくつも見られる。林哲佑（イム・チュルウ）「父の地」、李滄東（イ・チャンドン）「焼紙」、朴婉緒（パク・ワンソ）「母さんの杭」はいずれも朝鮮戦争、南北分断という歴史的悲劇の記憶とトラウマが、なにかのきっかけに突然抑圧を破って湧出し回帰してくる話である。いずれも夫あるいは息子を失った女たちの、なんによっても癒されない悲哀がじつによく描かれている。なかでも「空港で出会った人」の作者であった朴婉緒（パク・ワンソ）の、長く心中に封じ込めてきた過去が手術後の病院で突如現在に取って代わり、現在を無化してしまふ老母の錯乱を描いた作品は絶品で、この女性作家の別の作品も是非読んで見たい気になされた。また、この時代の重苦しい社会的閉塞感、人々の遣り場のない絶望と鬱屈のようなものは朴相禹（パク・サンウ）「シャガールの村に降る雪」や、かつて軽妙なタッチで「家族」を書いたあの崔仁浩（チェ・インホ）の「深く青い夜」にさえも色濃く出ている。

上巻に収められている九〇年代の作品では、ヘパンソリの精神と言ったら言い過ぎになるだろうが、ともかくどこまでも逞しく明るい諧謔と笑いの精神がいずれも痛快と言うしかない孔善玉（コン・ソノク）「かあちゃん シングルマザー」、キム・チョングアン「警察署よ、さようなら」のような作品に見られる。また、とくに韓

国の近現代史、民族性を意識しなくてもごく普通に読める作品もあり、平凡な日常生活に潜む狂気を描いた殷熙耕(ウン・ヒギョン)「妻の箱」、非行少年の無軌道で暴力的な生と性を題材にした金英夏(キム・ヨンハ)「非常口」などがそうである。ただ私がいちばん親近感と共感をもって読むことができたのは、尹厚明(ユン・フミョン)「狐狩り」だった。しばらくまえまで反共を国是としていた国で生きていた主人公はソ連崩壊後のロシアを旅行した折、かつて共産主義の理想を信じてソ連に行った友人と再会し、昔ソ連兵だった退役軍人ふたりとともに、サンクト・ペテルブルクからはるか遠方の酷寒の山中に狐狩りに出かける。その情景の息詰まるような描写に重ねて、主人公とその友人の過去と現在の取り返しつかない関係が、主人公のためらいがちな回想・感慨の形で少しずつ明かされてゆく。私たちが夢み、あるいは堪え忍んだこれまでの年月は、いったいなんだったのだろうか。すべての意味を虚しくしてしまう不可逆的な時の残酷さが、プーシユキンの詩を適所に配するなど、洗練された語りの巧みさによって見事に表現されている。

3

最後に翻訳の問題にすこしふれておこう。三枝さんは言ってみれば深沢七郎の土着的な荒々しさと石川淳の知

的な饒舌を兼ね備えたような日本語を駆使する名訳者だと思われるが、その三枝さんには外国文学の翻訳についてこのような考えがある。

「近代の日本で、翻訳が重要な位置を占めたのは、もちろん自分たちより進んでいる地域の文化を取り入れるためだった。だが、それと同時に自分たちも先進国と同じものが作り出せるのだ、ということを示すためでもあった。文学について言えば、日本人が西欧と同じものを自分たちのものとすることができる、つまり同じものを作り出せることを示すことだった。日本における翻訳は、こうした準創作つまり一種の自己表現の要素を帯びていたのである……だが、文学作品がある言語の特質を極限まで生かした技巧の産物だとすれば、それを過不足なく他の言葉に写すなどということがありえないのは自明である。もし翻訳が自己表現の要素を帯びた準創作ならば、日本の読者を対象にした自然な日本語の翻訳しかありえない。原文を正しく写すことが犠牲になることもありうるだろう……だが非西欧の地域まで含めたときには違ったあり方が考えられるのではないだろうか。つまり、異質な文化を背景にした、発想法や思考方式を理解するための翻訳があってもよいのではないかということである」(『現代韓国短編選』解説)

近代日本の西欧文学の翻訳にはここで三枝さんが述べているような準創作的、したがって原文への忠実さが犠牲にされ、規範的な日本語に置き換えられる一面があったことは事実だろう。いや、いまでもその傾向が強いか

もしれない。しかし、たとえば私が関係するフランス文学では原文中心主義は久しい以前から常識になっていて、私自身もできるだけそのような態度をとっている。ただ、理論上の原文中心主義とその実践との距離が日本語の可能性、訳者の能力の限界、そして「できるだけ多くの読者のために、できるだけわかりやすく」という出版社の無理からぬ要請などのために、容易に埋められないというにすぎない。

しかしだからといって、原文の同質性、同一化可能性ではなく異質性、同一化不可能性を提示する翻訳こそが重要であり、朝鮮語が比較的日本語に近い言語的特質をもっているだけにおのおのこと異質性、同一化不可能性を明示する翻訳でなければならぬという三枝さんの主張が正論であることに変わりはない。これはベンヤミンが「翻訳者の使命は、翻訳の言語への志向、翻訳の言語のなかに原作の銜を呼び覚ますあの志向を見いだすことにある」と言ったのに通じる考え方だが、もっと広く私たちの他者との関係、あるいは異文化との関係についても原理的に言えることだろう。他者、異文化の異質性、同一化不可能性に無自覚のままそれを安易に同質性、同一化可能性に転化し、解消してしまうのは結局、他者、異文化の否定、無化にほかならないからである。それは精神の植民地主義とでも言うべきものになりかねない。「他者の他者性を否定せずに他者の他者性にかかわること、それが友愛だ」と言ったのはエマニュエル・レヴィナスだが、これは私たちが個々人の実存のみならず、異文

化との関わり方についても同様のはずである。

